

オノ次平城宮跡発掘調査終了報告

特別史跡「平城宮跡」における奈良国立文化財研究所のオノ次発掘調査は、昭和37年11月29日に開始し、昭和38年6月20日に終了した。調査は、オノ次発掘調査地域の東にあたる6AA0-L・N・O地区と西の6ABB-A・B・C・D・E地区で行った。調査総面積は64ノールである。

調査であらたに検出した主な遺構は、建物6棟・柵4列・溝3条で、これまでの調査で一部を検出し、今回全貌または延長部分の判明した主なものは、建物4棟・回廊/面・築地2面・柵1列・溝2条である。

今回の調査地域は、前回に発池と推定した幅約45mのSG500の東西延長部分はその中央を横断しており、軟弱なその埋没土上面における遺構の検出は困難を極めた。このSG500は、6ABB-E地区北東部で、その南西隅が検出され、こゝで北折することが確認された。すでに63年度年報で報じたようにこのSG500は現存の平城天皇御梅陵を後円部とする全長250m余の前方後円墳の前方部前面の周濠にあたるもので、平城宮内に位置するこの古墳の前方部は平城宮造営に際して破滅削平され、その周濠も埋め立てられたと推定されるにいたつた。

古墳周濠の埋没土上で検出された平城宮の遺構は、大別して4地区に分けられる。

オノは、オノ次内裏内郭回廊北面廊80050の一部分で、今回は幅530mの底石と高さ250cmの礎石を残す凝灰岩切石の北雨落溝と側柱の凝灰岩礎石すえつけ痕跡を検出した。この北面築地回廊800

60の築地以南は現一条通り下にあたる。北雨落溝の北約2.5mにあるSA486は今回で東へ27間分約80mを検出した。

オ2の地区は内裏外郭内北部にあるSA505と488の2面の築地で南と西を限られた一郭である。今回の調査では、SA488を東へ約7.5m追求め、その中央や西よりで門BB575を検出した。BB575は、前回はSA488の西端で発見したSB48Dと同構造で柱間約3mの東西掘立柱2本とその南北約2.3mに川原石の雨落溝を配したものである。SB575とSB489は約30mの間隔をおいて配置されている。築地一郭内の建物では、前回は西半を検出したBB540と508の東妻部分を検出し、それぞれ桁行ノ8間および9間と東西に長大な建物であることが判明した。あらたに発見したものでは、SB590は3×2間南北棟建物で、70×600mほどの上面の平らな不整形の自然石を礎石としており、礎石が2個他はその礎石を検出した。柱間は桁行で3.9m、梁行が3.3mである。SB600は6×2間南北棟建物であり、礎石を用いたものらしく、礎石を伴う浅い掘りかたを検出した。この建物は当所桁行梁行ともに柱間3.3mであつたものをのちに改築し、桁行柱間を3.5としている。そのため改築後の北妻は同位置だが、南妻は1.2mほど南にずれている。SB533は梁間ノ間の東西棟建物で、東妻は未調査地域にのびているらしい。掘立柱建物であり、柱間は約2.5mである。SB540の両側柱東オ2をから南へのびる掘立柱間SA585はこの一郭を区切る機能をもつていたのでないかとみられる。柱間は約3mであるが、北分3柱間のみ約4mと広く、門のような開口部が設けられていたかもしれない。

ほかに、柱間約3mの掘立柱の南北櫓SA630、SB540とSA630をつなぐ小孔からなるSA631がある。

オ3の地区は、築地SA505の外方で、現在の歌姫街道以東の部分である。こゝでは、前回検出のSB498の北妻とSB520の西妻を検出し、いずれも桁行5間と判明した。あらたに検出したものではSB555は7×2間南北棟で、棟通りにも柱がある倉庫風の建物である。遺構はわずかに残存する根石または極めて浅い礎石すえつけ痕跡からなる。柱間は、桁行で3m、梁行は2.7mである。その南に重複するSB550は東西24m、南北27mの間隔をおく各3列の小孔からなる掘立柱建物である。SB550の西に平行して検出された素掘りの溝SD568と569はあるいはその間が築地になるものかもしれないが、南部は旧地表がかなり深く削りとられ、SD569は消失しており、南北に通ずる築地か否かはなお決し難い。SA570は柱間約3mの掘立柱列だが、南北端ともに未確認である。西側柱が道路下にある南北棟建物の東側柱列にあたるものかもしれない。

オ4は、6AB-0区の推定大膳職跡とオ2次内裏を限る道路部分と考えられる地区である。この地区の西端には、オ8次調査で一部検出した築地SA350が南北に走り、東限は幅約1.5mの素掘りの溝SD572で面されている。この間の幅約1.5mの部分は北西からのびる溝状のくぼみやその他の凹凸を埋めたてた上に礫を一面に敷いており道路としてのこの地区の機能を推測せしめた。SD572は西からのSD267や東からのSD487を合わせ、さらに南にのびている。

以上のように、オノ次調査では、オノ次内裏地区の外郭内北部の実体を明らかにし、西の官衙地域との境界が確認された。

遺物は、鬼瓦1点、軒丸瓦280点、軒平瓦180点、丸・平瓦70袋、須恵器・土師器約600点を検出した。目下整理中であるが、軒瓦でオノ次内裏所用の63/1-6664の組合せが多く、小型の63/4-6666の組合せが混在するなど、いずれもオノ次調査と類似の傾向がみられる。

平城宮第10、II次発掘調査発見遺構

